

七歩の詩

曹

植

豆を煮るに 豆莢を燃く

豆は釜中に在りて泣く

本是れ 同根より 生ず

相煎る 何ぞ 太だ 急なる

【作者】曹植(一九二一年〜二三三年)。曹操の子で、曹丕の弟。詩人として有名で建安時代を代表する作家であり、「建安の傑」と称される。その才能によってかつて父曹操より太子にされようとしたこともある。父の死後、曹丕らによつて種々の迫害を受け、その思いをこの詩に託した。四十一歳の時、兄・曹丕の後を追うように、不幸な裡に世を去つた。

【語釈】*煮豆…豆を煮る。 ・相…動作が対象に及ぶ時の表現。

【通釈】豆と豆莢とは、本来同一の根から生えている、いわば身内だが、豆莢(豆がら)は燃えて豆を煮て来るので、豆は堪えかねてカマの中で泣いている本来は同じ根から生長した。豆莢が豆をにることによってそんなに急ぐのか。

【備考】七歩詩…『古文眞寶』や『古詩源』にある。『古文眞寶』のもの。『兄弟』詩である。兄弟仲、兄弟愛を提起する詩である。皇帝である兄・曹丕と作者・曹植とはともに曹操の息子で兄弟であるものの、才能をめぐり、仲が悪かった。兄・皇帝より才能や行動を疑われ、「七歩進むうちに詩を一首、作つてみせよ」と命じられ、曹植は七歩で「兩肉齊道行、頭上帶凹骨。相遇凹山下、起相突。二敵不俱剛、一肉臥土窟。非是力不如、盛氣不泄畢。」と作つた。これが『七歩詩』である。するとさらに、「七歩で作るのでは遅すぎる。言われた声と同時に作れるか。『兄弟』という詩題だ。」曹植は即座に「煮豆燃豆、豆在釜中泣。本是同根生、相煎何太急!」(豆を煮るに豆(まめがら)を燃やせば、豆は釜中に在りて泣く。本是れ同根に生ぜしに、相ひ煎(に)る(と)何ぞ太(はなは)だ急なる?)と口ずさんだ。これを聞いて曹丕は涙をこぼした。